

## 課題管理実施報告書

報告日：09年 11月 27日

プログラム	アジア科学技術の戦略的推進
課題名	アジア科学技術コミュニティ形成戦略
実施日	2009年 11月16 日(月) ~11月18日(水)
場所	Amari Rincome Hotel, Chiang Mai
形式	一般公開・シンポジウム・セミナー・講演会・ワークショップ・その他 ( ) 展示物 (有) (機器・設備) (パネル) ビデオ上映 体験型 その他 ( )) 無
対象者	(一般) 学生 (中学・高校・大学) その他 (日・タイの大学研究者, 学術助成機関、研究者および職員, 企業団体職員)
来場者	人数： 78名、(内訳 講演者19名, 参加者 59)
周知方法	(新聞) 雑誌 学会誌 メディア取材 (プレスリリース) HP, (メール発信) その他 ( )
実施者	主催：日本学術振興会バンコク研究連絡センター 後援：National Research Council of Thailand, 在チェンマイ日本国総領事館, チェンマイ大学, 日メコン交流年事業認定
内容	<p>日本とタイにおける大学の地域貢献について1) 地域イノベーション：大学と企業の協力2) 地域コミュニティへの保健・医療の支援3) 持続的な観光開発と地域資源の利用 焦点を当て、上記の活動に関わる研究者、政府・企業団体の職員、地域の住民組織が地域貢献への取り組みの現状や事例研究を紹介し、日・タイで地域貢献について協力を進めるための議論を行った。</p> <p>プログラムの概要：</p> <p>Nov 16</p> <p style="padding-left: 2em;">Session 1: Regional Innovation: University-Industry Collaboration</p> <p style="padding-left: 2em;">Session 2: Supporting Community and Region</p> <p>Nov 17</p> <p style="padding-left: 2em;">Session 3: Regional development, Sustainable Tourism and Wise Use of Local Resources</p> <p style="padding-left: 2em;">Session 4: General Discussion: Toward Networking</p> <p>Nov18</p> <p style="padding-left: 2em;">Study tour: The Research Institute of Health and Sciences, Chiang Mai University, Murata Electric Co. Ltd. (in Northern-Regional Industry Estate</p> <p>会議の進行: 各セッションは3時間, 日本とタイの研究者1名ずつが基調講演を行い, 続くパネルセッションで2名から6名の講演者が発表し, それぞれのテーマについて議論を行った。セッション4の総合討論では, 各セッションの座長が議論の要点に発表し, その後全体のセッションを通じて大学の地域貢献における重要な点, 問題点や, 国際協力の利点や協力を進めるための提言などについて議論した。</p>
効果、問題点、今後の展望と課題	<p>効果</p> <p>○ 第1回の会議の成果を受け、テクニカルセッションに分けてより詳細な議論をおこなったことで、大学が地域振興に貢献するためのいくつかのポイントを明確に</p>

	<p>することができた。たとえば、地域イノベーションにおける‘コーディネータ’とそれを支援するプログラムの重要性がタイ・日共通する点としてされた。そのような議論をもとに、タイ・日で共同して取り組む地域振興事業の有効性が認識された。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 第一回の会議ではほとんど参加のなかった企業，一般からの参加を得たことで，大学からの一方的な視点でなく，大学に係る地域貢献への取り組みの成果や課題を評価，議論することができた。</li> <li>○ タイと日本の研究者の間だけでなく，同じ国の研究者が知り合い，新たな協力関係を気付くきっかけを作ることもできた。地域振興分野における国際協力において，それぞれの国内のネットワークが強まることもその発展に貢献するものと考えられる。</li> </ul> <p>問題点</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ より地域振興の現場に近い開催場所として，タイ有数の地方都市チェンマイで会議を開催したが，チェンマイ大学からの貢献が多く得られ，またより具体的な課題を知ることができた一方で，タイ国内の他地方からの参加が限られてしまった。また，遠隔地の開催であるために会議の準備にはそれだけ労力を必要とした。</li> </ul> <p>今後のコミュニティー形成に向けての展望と課題</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 第1回の会議がタイ・日の地方の大学が広く互いを知る機会となったのに対し，第2回の会議では大学の地域貢献において専門分野を同じくする日本とタイの研究者の交流の機会を作ることができた。</li> <li>○ 特に地域イノベーションの分野については，より詳細な事例についての議論（例：成功例と失敗例について客観的な解析に基づく議論）を行うワークショップの企画が提案がなされるなど、本会議を契機にして、協力のネットワークの形成に向けた姿勢が示された。</li> </ul>
<p>反省事項</p>	<p>反省点</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ テクニカルセッションに分けて詳細な議論を行ったことで，各セッションでは深い議論をすることができた一方，大学と地域の関わりにおいて，たとえば産官学連携と地域医療の分野では，共通しない事柄も多くセッションを合わせた総合的な議論を進めることがやや難しかった。テクニカルセッションについては，もう少し，分野を狭くしより詳細なサブテーマを設定すれば，会議・参加者全体でのより密な議論が行うことができたと考えられる。</li> </ul>
<p>特記事項</p>	<p>気づき事項、要望等</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 他機関との共催を目指したが，会計年度の違い，本事業の会計の柔軟性などの制約もあり他機関からは一部の支援を受ける形に留まることになった。</li> <li>○ 本会議はバンコク研究連絡センターの企画により行ったが，研究者によるネットワークの構築という目的を考慮し，各テクニカルセッションの企画や進行は日本とタイの研究者による共同議長にお願いした。しかし，このような企画の仕方では，研究者のネットワーク構築を目指すという意識は受け身勝ちになる。研究者</li> </ul>

	<p>による会議の企画を研究連絡センターに提出してもらい、センターと共同で会議の詳細について調整を進めて会議を開催すれば、このような問題点を避けることができるかもしれない。</p>
--	--